

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	マスワナ 紗矢子
論文題目	A Cross-Disciplinary Genre Analysis of Research Articles: A Focus on Rhetorical Structures (学術論文の分野横断的ジャンル分析—修辞構造に焦点をあてて—)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、「学術目的の英語」(English for Academic Purposes: EAP)研究における理論的枠組みの観点から、複数分野の英語学術論文の修辞構造を分析した分野横断的ジャンル研究である。本論文は以下の七つの章から成る。</p> <p>第1章では、「学術目的の英語」研究と学術論文のジャンル研究について概観している。具体的には、学術論文を対象としたジャンル研究における実証的な分野横断的分析の必要性、および「一般学術目的の英語」と「特定学術目的の英語」の枠組みに基づいたジャンル分析の重要性を論じている。さらに、各分野の専門家集団(ディスコース・コミュニティ)の視点をジャンル分析に導入する意義を主張している。</p> <p>第2章では、「学術目的の英語」の上位概念である「特定目的の英語」におけるジャンル研究の諸課題を提起している。これまでのジャンル研究では、一般に、テキストの修辞構造やジャンルに特徴的な言語表現を分析し、ライティング指導に活かしてきた。そこでは分析対象論文が英語教育研究者の主観によって選択、分析されているため、結果の信頼性や示唆の範囲が限定的なものであった。加えて、学術論文で 사용되는重要表現を修辞構造と関連づけて検討する視点は顧みられてこなかった。このような点を踏まえて、本論文では、複数分野の専門家集団の視点を取り入れ、修辞構造と表現の関連性について考察を試みている。</p> <p>第3章では、データ収集および分析方法など研究手法について詳述している。本研究では、調査協力者として15分野の専門家が参加し、論文(計423本)のテキストを対象としてジャンル分析を行っている。まず、Swales(1990)の分析モデルに依拠してムーブ(move)を修辞構造単位と定め、各研究分野の専門家に依頼し、論文テキストに見られるムーブについて専門的見地から識別を行っている。つぎに、使用頻度と出現範囲に基づきムーブの識別結果を整理し、記述的手法を用いて規範的な修辞構造を提示している。さらに、各分野の専門家によって有用性の観点から抽出された表現をムーブごとに整理し、それらと統計的手法により抽出された頻出表現を形式と機能の二つの観点から比較している。</p> <p>第4章では、各分野の修辞構造を明らかにし、分野間の類似点および相違点について論じている。複数分野の論文を分析対象とすることにより、従来の規範的なムーブに加え、文学や法学といった各専門分野における新たなムーブを発見し、それらの展開について知見を提供している。さらに、分野横断的分析により、これまで主に直線</p>			

的であると考えられてきた論文の修辞構造が循環的な性質をも有することを見出している。例えば、研究の「結果」を提示し、解釈するという二つのムーブの展開においては、提示と解釈の繰り返しが顕著であることを明らかにしている。また、教育学、工学、農学などの分野の「序論」においては、規範的な修辞構造が広範囲で出現することを指摘している。こうした分野横断的な特徴については、実験方法や分析手法の観点からも考察を加えている。

第5章では、単一分野内の諸領域における修辞構造面での類似点と相違点について検証している。事例として工学分野から五領域の論文を取り上げ、比較分析を行っている。その結果として、「要旨」や「序論」においては全領域間での類似性を確認している。同時に、特定の領域間に限ると、例えば「議論」においては化学工学と環境工学との間でムーブの使用範囲に類似性が見られるが、その一方で、ムーブの使用頻度においては異なる傾向が見られることを指摘している。単一分野内において違いが生じる要因について、専門家集団の文化の観点から論じている。例えば、環境工学などの学際的な領域では、各専門家の研究背景を考慮して、研究の位置づけと意義をより明確にするために、同一種類のムーブを複数回用いて循環的に議論するという特徴があることを指摘している。

第6章では、各分野の専門家によって抽出された英語表現と修辞構造との関連性について検討している。専門家が論文執筆に有用であると考えられる表現は「序論」や「議論」に集中していることを示している。さらに、専門家による抽出表現を文脈内で解釈することにより、一般的な接続表現や分野における専門表現だけでなく、ムーブごとに特徴的な表現を提示している。こうした表現の使用実態の検証を通して、専門家集団の視点の重要性を示している。

第7章は、全体の結論にあてられている。これまでの分析結果を踏まえて、これからの「学術目的の英語」教育研究に対し教育的示唆を提供するとともに、今後の研究に対して新しい展望を示している。具体的には、ジャンル分析の観点から「一般学術目的の英語」教育研究と「特定学術目的の英語」教育研究とを有機的に関連づける提案を行っている。その一例として、修辞構造と英語表現の関係性についての理解を深めるための可視化について言及している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、「学術目的の英語」(English for Academic Purposes: EAP)研究の視点から英語学術論文の修辞構造と表現の特徴について分野横断的に分析した研究である。これまでのEAP研究では、学術論文というジャンルに対し、特定の分野に限定して分析を行うことが一般的であった。これは、学術論文の分析に高度な専門的知識が必要とされ、外国語教育の研究者だけでは複数の分野を横断的に分析することが非常に困難であったことが原因として挙げられる。また、分析する分野が限定されていただけでなく、修辞構造についても、従来、規範的な論文の構造として挙げられていた「序論、方法、結果、議論」の構造のみを対象にした分析が多く行われてきた。しかし、分野を限定し、規範的な論文構造のみを中心的に取り扱った従来の研究では、特定分野以外の領域に属する論文について、修辞構造や表現の分析が十分に深められてこなかった。この問題に対し、本論文では、各分野の専門家の協力を得ることにより分野横断的な分析を実現している。

本論文の独自性としては、まず、分野横断的なジャンル分析において各分野から幅広い専門家の協力を得て、その専門家が分析する際に論文テキストをムーブ(move)と呼ばれる修辞構造単位ごとに識別するという手法を採っている点が挙げられる。これによって、修辞構造の分析において**専門家集団**の視点を取り入れた分析が可能となり、専門家集団に属する研究者が論文テキストを解釈する過程についても明らかにしている。

さらに、ムーブを分析単位として設定し、規範的構造を持たない論文も分析対象とすることで、それらに見られる新たなムーブを発見し、その下位構造を明らかにしている。従来のジャンル分析が狭い範囲の分析に留まっていたため、これまで直線的と捉えられていた論文の修辞構造は、実は多様で循環的であることが本論文によって示されている。本論文が、複数分野の論文を同じ基準に従って構造を比較・検討し、各分野や各領域の類似点や相違点を示すことで、学術研究における「分野」の概念についても新たな枠組みを提案した点は高く評価できるものである。

また、修辞構造と表現を関連づけて考察するという視点も本論文の独自性として評価できる点である。非母語話者は英語論文の執筆において必要となる真正性の高い英語表現を身につけなければならないが、従来の研究では重要な英語表現はおもに使用頻度と出現範囲(カバー率)を基準として統計的に抽出されるか、あるいは、EAPをはじめとする英語教育研究者の経験的な判断によって決定されることが多かった。しかし、本論文では、各分野において実際に英語論文を執筆

したり、評価したりする専門家集団の視点を反映した表現の抽出に成功している。そして、EAP研究者の視点から専門家集団が抽出した表現を論文の文脈において再解釈することで、より精度の高い分析を行っている。実際に抽出された英語表現がEAPの教育現場において果たす役割は非常に大きく、本論文の有用性を示すものとなっている。それだけでなく、本論文における各分野の専門家と英語教育研究者が表現の抽出過程において果たした役割が、今後のEAP研究のあり方への示唆を提供している点も非常に有益である。

以上述べたように、本論文では、修辞構造と表現における分野間の関係性を明らかにし、分野共通に必要な学術論文の修辞構造の知識、そして各分野に特徴的な修辞構造の知識という二つの観点から整理することに成功している。さらに、本論文では、特定の分野に縛られない、あらゆる学問分野の基礎となる「一般学術目的の英語」(English for General Academic Purposes: EGAP)の視点に基づいた教育的示唆を提供している。具体的には、EGAP教育として各分野に共通して見られる修辞構造を指導対象とすることや、文脈情報の付いた英語表現の資料を活用することを提案している。また、ジャンル分析の結果を学習者に分かりやすく提示するために、構造を記述するためのプログラミング言語(グラフ記述言語)を用いて修辞構造を可視化するという新しい応用事例を提案している。

以上のことから、本論文は、外国語教育におけるEAP研究において、論文の修辞構造の分析に新たな領域を切り開いた点と、専門家集団と英語教育の研究者による分野横断的分析を実証的に行った点で極めて意義があるものと高く評価できる。また、本学位申請論文を通して確立された手法とそこで得られた知見は、分野を越えた修辞構造の共通性を解明している点で、英語に限らず他言語での教材開発研究の指針となるものであり、人間・環境学研究科外国語教育論講座の研究としてふさわしい内容を備えたものであると言える。

よって、本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：平成27年3月24日以降